

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (VII)

——А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае——を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (VII)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

Chen Jionming stated his promise to liberate Canton to the Chamber of Commerce. This alarmed the Government. Blyukher said that General Chen Jionming's offensive must be prevented by an offensive of our own, launched by our best troops.

Training personnel for the National Revolutionary Army at the Whampoa School began to yield fruit. The cadets graduating from the school provided commanders for the first two regiments of the new army.

孫文の広東政府は商団軍の反乱を鎮圧して一時の危機はおさまったが、かつての孫文の支援者でもあった広東の軍閥、陳炯明の挑戦を受けねばならなかった。軍事顧問、ブリュヘルは、先制攻撃を主張し、これが受け入れられた。この時、正式に黄埔軍官学校に二個連隊の軍隊が成立した。これが将来の中国国民党軍の最初のものであった。この軍隊を基礎に広州の東部に向かって進撃が開始された。ここで、作戦行動の実地訓練を受けた軍官学校二個連隊は次に起こる広州でのクーデターをも見事に鎮圧し、最終的に広東を孫文政府の根拠地に変える事ができた。以下はこの作戦の軍事顧問、А.И. Черепанов の回想録、〈Записки Военного Советника в Китае 1976. НАУКА〉の中の東江作戦の全訳である。(174 頁～210 頁)

出 撃 開 始

1925 年 1 月, В.К. Блюхер は顧問達を集め、微笑を浮

かべて次のように伝えた。

—奇妙に思えるかも知れないが、私が政府に東方出撃を直ちに組織し、開始する必要性を立証するうえで助けとなったのはまさに、陳炯明將軍であった。諸君も知っているように、陳炯明が汕頭で配下の將軍達と会議を開き、その時、広州進撃の計画を作成した、という情報を政府は 11 月中旬に入手した。

陳炯明の計画は要約すると、次のようなものである。林虎將軍麾下、兵員 1 万 5 千の歩兵 4 個師団から成る右翼縦隊は博羅地区に集結し、広州-九龍鉄道の北側で広州への進撃に転ずる。洪兆麟麾下、兵員 1 万～1 万 2 千の 15 の独立軍団と部隊から成る中央縦隊が石竜-石灘地区に集結し、林虎の部隊と協力し、鉄道に沿って広州に進撃する。

劉志陸將軍麾下の左翼縦隊は石竜の南東に集結し、その一部の兵力で虎門島を占領し、かくて広州と、中国の他の地域とのすべての関係を断つ任務を持つ。この縦隊の残りの兵力は広州進撃に向かい、全軍の主力部隊の側面および後方を確保する。

В.К. Блюхер は続けた。12 月 25 日商業会議所に宛て

昭和 61 年 10 月 1 日受理

た陳炯明の電報がようやく、政府を不安にさせた。彼はこれの中で、広州をく解放する>と約束した。私は1つの質問を受けた：広州に差し迫っている脅威をいかにして避けたらよいか。私は答えた：最上の部隊すべてを作戦に投入し、こちらから進撃することによって、陳炯明將軍の軍隊が進撃して来るのを予防する。

私の提案は、范石生將軍の第2軍団の指揮官の下にある第2、第3軍団に、軍事委員会が予定している南ではなく北のグループを形成させ、東江に沿って博羅、河源、龍川、五華、興寧方面に進進させることである。実際には無論、彼らは進撃しないであろうが、この方面に集結するならば、林虎將軍の進撃の道を閉ざすであろう。

中央グループである劉震寰將軍麾下の広西軍に課せられた任務は惠州要塞を占拠することである。南方グループを構成する第2歩兵師団(兵員2千)、第7独立旅団(兵員4千)、広州軍独立連隊(兵員1千)、黄埔軍官学校歩兵2個連隊(兵員2千5百)は許崇智將軍の指揮下にあり、その任務は敵を広州—九龍鉄道の香港側の境界線まで掃蕩し、次いで最も近くて最良の道である淡水—海豊を通り、汕頭攻撃に転ずることであった。この地区には彭湃をリーダーとするコミュニストの指導の下で、農民運動が広く展開されていた。東方出撃に際し、広州を援護していたのは北方では、譚延闓將軍の湖南軍で、南西は、梁鴻楷將軍の第1広州軍団であった。少数の上陸部隊が海から汕頭へ上陸する予定であった。

В.К. Блюхер は話を続けた。参謀会議の一つで、数人の中国の將軍が私の計画に異議を唱えた。彼らの言うところによると、汕頭に向かう最短かつ最良の道の場合、惠州に陳炯明の支援者である楊坤如將軍の守備隊が配置され、封鎖されている。またその強力な城壁とその前にある自然の障碍物——一連の湖や川——が惠州に難攻不落の要塞という栄誉を与えている。2千年間、この要塞は一度も占拠されたことはなかった。現在の我々の世代の者は惠州が38回強襲されながらいずれも不成功に終わったのを目撃している。我々にはこの城壁を破壊することのできる砲兵隊がない。

—しからは、我々は惠州を迂回しよう、と私は答えた。

長い討論の末、我々の計画が採択された。結局、広州政府の圧力があって、軍事委員会議長楊希閔が出撃の命令にサインした。東方出撃を行うには良い状況である、とВ.К. Блюхер は語った。実際、9月に北方で、

英米帝国主義の手先である直隸派軍閥と親日派の將軍達との間で戦闘が始まったため、革命の広州に反対する<十字軍>を起こそうという呉佩孚元帥の意図が挫かれた。

国民革命軍の基幹要員を育成するために、コミュニスト達が黄埔軍官学校で行った巨大な仕事の実を結び始めた。軍官学校の卒業生がその時初めて組織され、新軍2個連隊の指揮官となった。

孫文の忠実な同志である廖仲愷はこの時まで、譚延闓と程潛を長とする湖南軍、朱培德將軍の雲南軍の1軍団、許崇智將軍指揮下の広州軍の1部隊を、確実に政府側に引き寄せることができた。

我々軍事顧問団の指揮の下で、広州防衛計画が作成された。その際、技師Е.А. Яковлев と М.Я. Гмира の参加を得て、広州の道路に防衛構造物が至急、建設された。中国共産党の最も重要な任務の一つは広東および湖南省で、大きな労働者、農民運動を組織化することであった。

В.К. Блюхер は広州で開かれたレーニン追悼の集会の一つで、<我々の力は国内における急激な革命意識の高揚と、働く人々の民族意識の成長である。>と述べた。

いくつものレーニン追悼集会が持たれたことは明らかに革命精神の高揚を示していた。私はこのようなデモにいくつか参加した。そして、それらは私の記憶に一生残っている。

レーニン追悼の日は広州では、労働日であった。企業内の集会は昼休みに行われたが、夜には、市内のいくつかの場所で大きな民衆集会が行われた。

発言者達が述べたのは、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルクのような革命の英雄、射殺されたストライキ参加者、広州で革命の大義のために倒れた英雄達のことであった。発言者となったのはコミュニスト、国民党员、黄埔軍官学校の生徒、農民運動講習所の学生、大学生、労働者であった。私が記録しておいたいくつかの発言の中から一節を引用しよう：

<レーニンは人類の目を開いた。彼は幸福を求めて闘うように人民を指導した最初の人である。その御陰で、ロシアにおいて人民は勝利を収めた。我々中国人は帝国主義の圧制の下で苦しんでいる。我々はレーニンの遺訓を実現した時にのみ、解放されるのである。レーニンに関しては語ることが沢山ある。あらゆる民族の人々がレーニンを愛している。彼の死は革命の事

業にとって、大きな損失である。革命家達は人民の幸福のために、常に自己を犠牲にしてきた。そして、この点にこそ彼らの偉大さがある。>

もう一つの演説から：<ロシアは社会主義国である。そこには被圧迫者も圧迫者も存在しない。資本主義社会では、あらゆる人々を幸福にさせる、ということは不可能である。資本主義の世界では、土地は地主のものであり、大部分の人々は飢えている。しかし一方、少数の人々は余りに多くを持ち過ぎている。レーニンは死んでしまったけれども、全世界の人々が彼の教えを知っている。>

1925年1月21日、レーニン追悼の日に広州大学で大規模な集会が開かれた。私は軍官学校の生徒のグループと一緒に、この追悼集会に出席した。

集会は廖仲愷の言葉で始まった。広州の指導者達と共にB.K. Блюхерが議長壇に坐っていた。

開会の挨拶の後、集会参加者が中国の革命歌を歌った。次いで廖仲愷はB.K. Блюхерに発言を認めた。このソ連の司令官はレーニンを革命的階級闘争の最大の戦略家である、と述べた。さらにまた、レーニンが死んだことによって、ソ連の人々だけでなく植民地国家の人々もまた、偉大な指導者を失ってしまった、と述べた。B.K. Блюхерの演説は中国において民族-解放革命を成功裏に完遂させよう、というアピールで締めくくられた。全員が彼の演説に注意深く耳を傾けていた。しばしば、嵐のような拍手で演説が中断した。

農民運動の指導者の一人が中国人民のために命を捧げた、6人の農民のアジテーターの事を述べた。黄埔軍官学校の生徒の一人が北京-漢口鉄道のストライキで射殺された、その指導者の英雄的行為について語った。多くの国民党右派の指導者達は、後に革命を裏切ることになるのだが、その時は声高に革命的演説をした。胡漢民は彼特有の冗長な演説の中で、ロシア革命が勝利を得た諸原因について述べた。許崇智将軍が国民革命は労働者、農民の支持が無かったならば、必ずや失敗するだろう、と述べた。労働者、海員、農民組合の代表者がプラカードと旗を持ってステージに昇り、レーニンの肖像の傍に花環を供えた。レーニン、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、孫文博士の写真や、<インターナショナル>の歌の中国語、いろいろな宣伝ビラが出席者に配られた。

広州の中国青年軍事委員会のビラには次のように書かれていた：<レーニンは世界革命に身を捧げた。東方諸国で果たしたレーニンの革命に対する功績は巨大

なものである。そのうえ、彼は中国革命の計画の基礎を築いた。我々は心に愛をこめて、偉大な革命の指導者レーニンを思い出す。>

反革命陣営が脅威をもって迫ってきたまさにその時、広州のレーニン追悼集会は大衆の革命的熱情の真の強さを示した。

陳炯明将軍の背後にあったのは外国の帝国主義者と封建的地主であった。彼らは自慢した：<広州や黄埔の連中が攻撃したいならさせろ。陳炯明がこのつかみの連中を撃破するであろう。彼らが逃げ出すや否や、雲南軍が彼らを武装解除する。>

総攻撃が始まる前に、広州-九龍鉄道の石竜から南の部分にいる敵を掃蕩する、部分的作戦が行われた。

1925年2月2日、黄埔軍官学校の2個連隊、第16独立歩兵連隊が蒋介石の指揮の下（顧問B.A. Степанов, 政治顧問C. Шнейдер）に、虎門島と太平島に集結した。李福林将軍の第16歩兵旅団は東江デルタの東莞の向かい側にある一つの島、張明德将軍指揮下の第2歩兵師団（顧問Сахновский）および第7歩兵旅団は敵が放棄した、石竜地区に集結した。

蒋介石の南方グループに対して、2月3日、攻撃に転じ、第16旅団と協力して東莞市を占拠するよう、命令が下された。張明德の北方グループには、同日に石竜市を占拠するよう、命令が下された。

海上および水上部隊が虎門、太平島と東江デルタの警備を引き受けることになっていた：歩兵と協力して東莞と石竜を占領するために、砲艦の一部が割り当てられた。

しかし、艦隊の指揮官達は積極的な作戦行動を何とかして避けようとした。特に、河川運輸労働者達は、鉄橋の大きさがわからないので東江の作戦に参加できない、と言った：船が橋の下を通り抜けられるかどうか、彼らには分からなかった。石竜がまだ敵の手中にあったとしても、電信の連絡は可能であった。そこで、そのことに関する質問を石竜に送った。不思議なことに、返事が届いた。作戦行動をする予定の砲艦はそのマストの端を切り、煙突を短くした。

後で知ったことだが、<提督>達は敵よりもむしろ自分達の<同盟者>-雲南と広西軍を恐れていた。<Воровский>号が出航した後、南中国に残っていた海軍の顧問、Смирнов Светловскийは河川用砲艦の一部隊を東江の水路に、何とか入れることができた。しかし、川に沿って上流へ20~25キロ溯った所で、先頭の砲艦が浅瀬に乗り上げ、ここで<水路作戦>全体が終わった。

我々は東莞を強襲する準備をしていたが、敵は退却してしまった。そして、思いがけなく第16旅団が関わらずして初めて、町へ入った。石竜と東莞の両市を占領した後、蒋介石將軍に対して、鉄道に沿って香港の境界まで敵を掃蕩し、その後淡水の攻撃に転ずる準備をするよう、命令が出された。

2月7日、我々のグループの部隊は鉄道沿線のチアンツォン地区に出た。そして装甲列車の支援の下に、鉄道線路に沿って南への進撃を準備した。縦隊の先頭を行ったのは何応欽將軍指揮下の第1歩兵連隊であった。B.K. Блюхерは第1連隊の顧問である私の支援者として、砲兵の Бесчастнов と騎兵の Никулин を指名した。保有していた＜アリサカ＞型山砲2つのうち1つがこの連隊に与えられた。黄埔軍官学校の砲兵中隊の兵士達がそれを分解し、特別に作られた担架に乗せて運んだ。第2歩兵連隊の顧問は Палло で、彼の助手は工兵学校である Васильев であった。

2月8日、我々は捕虜から、淡水市を占拠しているのは Liang yang-sheng 將軍が指揮する第13連隊の諸部隊（兵員約1千名）である、と知った。彼は抜けない男で、惠州の楊坤如將軍からと同時に、香港の英国からも金を受け取っていた。捕虜の話によると、その連隊の將校達は広州より早く行きたがっていた；兵士達にとっては、軍閥の軍隊ではいつもの事だが、全体の事はどうでもよい事であった。將校達は国民党を反乱者の党と呼んでいた。孫文博士に彼らが与えたあだ名は＜孫砲＞（孫大砲一ほら吹き）であった。孫文は外国人としめし合わせ、彼らに地位を与え、中国を売り渡そうとしている、という噂が住民の間に執拗に広められた。

東江から南に向かって線路上に国民革命軍の部隊が出現した、という情報が入ると、Tanxindun に駐留していた千人以上の敵の部隊は撤退し始め、一部は東へ、一部は鉄道で南へ向かった。

2月8日、許崇智將軍と顧問団長 B.K. Блюхер は Shangtang 駅の車中で、政府のスタッフのほぼ全員と M.M. Бородин の参加する会議を召集した。

作戦の具体的な計画が採択され、それに応じて指令が出された：南方のグループは2月中旬までに淡水市を占領すること。前以って、黄埔軍官学校の連隊と第16独立連隊は2月10日までに鉄道線路全体を掃蕩し、且つ平湖地区から淡水市への攻撃準備をしておくこと；第2歩兵師団および第16独立歩兵連隊は塘頭厦地区に集結し、淡水攻撃の準備をしておくこと；第

7独立旅団は南方グループの後方および側面を援護する任務を持って、第2歩兵師団の後方に出ること；中央グループの広西軍は2月9日、Shangtang 地区に集結し、惠州要塞の攻撃に転じ、2月12日にそこを占拠すること、北方グループの雲南軍は増城地区に援護部隊を残し、2月12日に博羅を占領する任務をもって、それに対する攻撃に転ずること。

会議の後、B.K. Блюхер は軍事顧問達を自分の所へ招いた。彼は喜びの表情を浮かべて我々を迎えた。彼は作戦の開始がうまくいった時の軍司令官によく見られる、例の高揚した気分だった。展望車の中を行ったり来たりしながら、彼は我々に作戦計画を説明し、一人ひとりに具体的な、なすべき任務を指示した。

私が特に期待を寄せているのは黄埔軍官学校を中心に組織された部隊である、と Блюхер は述べた。その部隊は先導的なものとなるに違いない。またこれらの部隊での我々の顧問の役割は特に重要である。諸君は自分の軍事的技術と革命的情熱を示さねばならない。諸君のアドバイスは単なるアドバイスに終わってはならない。それらをうまく実現しなければならない。中国の指揮官達、さらに政治家達を不安にさせているのは惠州の要塞の成りゆきである。我々が何故、そこを強襲によって占拠せず迂回するのか、と彼らはしばしば尋ねる。彼らは我が軍の背後で敵が破壊活動をするのを恐れている。この点に関して特に騒いでいるのは雲南と広西の連中である。それは彼らにとって、自分達の消極性を正当化するに都合のよい口実にしかすぎない。彼らは我々が計画した作戦が実現できるとは思っておらず、許し難い無責任さで事に当たっている。このことを諸君は常に心に留めておかねばならない。広西軍を指揮していた將軍劉震寰は作戦が始まる前に、仕事を理由に香港へ出かけること以外にそれをのがれるうまい方法が見つからなかった。彼は副官を残しておいたが、副官は司令官が帰って来るまで何もやる気が無い。

雲南軍で構成されている北方グループを指揮している范石生も、この時まで自分の軍隊に戻ろうとはお考えにならなかった。彼は広州でひどくお忙しい。総司令官楊希閔は出撃の見通しについて全く関心を寄せていない。すでに述べたように、我々のすべての期待は広州軍と特に、黄埔軍官学校にある。もし、惠州要塞のことを諸君が尋ねられたら、悪魔は言われている程恐くはない、と答えなさい。話はここまで。質問が無ければ、では成功を祈る。

前進、淡水に向かって！ この呼びかけでB.K. Блюхерは我々との懇談を終えた。私を除く顧問達全員は意気揚々と出て行った。同志達には隠していたのだが、私には不運なことが起こっていた。数日前から私は赤痢で苦しんでいた。私は何も言わずに、上司にも報告せず、病気を押し出して出撃に参加しよう、と心に決めていた。私は連隊の中国人軍医に感謝している。彼は私にエメチンの注射を2度してくれた：だが、これだけで治療は終わりになった。彼にはそれ以上のエメチンが無かった。そこで、私は食事療法で治すことにした。我々のところに英国の乾パンが数缶あった。しかし、これはほとんど役に立たなかった。病気は治らず、非常に衰弱した。しかし、我々2個連隊には一頭の何応欽將軍所屬の乗馬しかいなかった（しかもそれはポニーだった）。

この地区には車の通れる道路は無かった。小道を徒歩で前進せざるを得なかった。もっとも、その中のいくつかの道には敷石が張られていた。荷物を運搬するために、平地では手押し車が使われた。荷物の大部分は、兵隊が天秤棒で運んだ。我々2個連隊に必要なものはすべて、この目的のために雇われた農民のポーター1大隊全員が運んだ。指揮官の主要な作戦上の作業は夜中に行われ、日中は移動に費した。連隊長と高級将校には休息したり、ぐっすり眠るのに使う籠があった。我々軍事顧問は人間が運ぶ籠に乗って移動することはできなかったし、何応欽のポニーを当てにするわけにもいかなかった。私は相変わらず、周囲の人々に自分の病気を隠して、歩いていかねばならなかった。

2月10日、Блюхерは汽車で、我々の部隊に追いついた。彼はБесчастнов、Никулинと私を呼び、行軍中の第1、第2連隊の隊形を賞め、我々に全般の状況を報告した。広西軍が鉄道沿線で足踏みをし続け、惠州への出撃を決めていると、我々は彼から知らされた。北方グループは実際には、前進しているというよりはむしろ、博羅へ進撃している振りをしているだけであった。雲南第3軍の司令官は＜軍隊の分割＞は望ましくないことを口実に、我々が出撃する際に北方からの攻撃を防ぐ援護部隊を、増城に配置することを拒否した。この援護部隊をつくるために、Блюхерは許崇智將軍に頼んで、広州から呉鉄城の公安連隊を呼び寄せねばならなかった。石竜へ通ずる道路はЯковлевとГмираの二人の技術顧問が指導して固められた。

B.K. Блюхерは次の事を我々に知らせてくれた。彼は2月11日に予定されている休息日を考慮に入れて、2

月12日に部隊が強力な急進軍を行うことができるように、それらの部隊を5～10キロだけ前進させておくよう、許崇智將軍に勧めた。敵を袋の鼠にさせることができるように、第2歩兵師団を岩棚の前にして、左翼に適切に配置することを勧めた。

2月10日、平湖駅付近で、我々の連隊の先頭部隊が敵と戦闘を開始した。最初の銃声を聞くとすぐに、私は何応欽將軍に状況が一層よくわかるように、鉄道線路の近くの小さな丘に上るよう提案した。だが、彼に何か良くないことが起こった：彼の顔は青くなり、目は廻り、足は立たなくなってしまった。3人の伝令兵（2人が腕を抱え、1人が後から支えて）やっとの事で、彼を私のいる丘に引きずって来た。そして、彼は恐らく自分のやっている事がよくわからないで、連隊を戦闘隊形に展開するための私のアドバイスを命令の形にして、まるで機械のように繰り返した。間もなく、何応欽の顔色は元に戻り始め、次第に我に返り、私のアドバイスを意識的に実行し始めた。

展開した連隊は断固、攻撃に移り、鉄道の駅から兵員300～400の敵の一部隊を追払った。2月11日の夜までには、黄埔軍官学校の生徒150名から成る部隊を乗せた装甲列車が国境の深圳駅を占拠した。

途中で、地方住民の参加する集会が2つ持たれた。住民達は初めのうち、我が軍に対して不信の念を持って対していたが、その後、著しく好転した。

装甲列車が到着すると、十分訓練を受けた、規律正しい部隊が車輛から降りてきて、国民党旗をはためかせながら、駅に整列した。コミニストである大隊の政治委員が集まった住民の前にして、すばらしい演説をした。＜革命中国万歳＞というスローガンを出席者一同、唱和した。

Блюхерに会った時、彼は我々に、作戦をいくつか見て、政府に忠実な軍隊を再編成する必要があることを、私はますます確信するようになった、と語った。

—主要な役割を演ずるのは量ではなく質である。3連隊で構成されている師団が3つか4つあれば、全く十分である。許崇智將軍は基本的に私の意見に賛成である。陳炯明を撃滅した後、3個師団を編成することが可能だ、と彼は考えている：1個師団は黄埔軍官学校の連隊から成るもので、他の2個師団は広州軍から構成される。勿論、これまでの部隊の指揮官達全員がこの改善に賛成するとは限らない—とБлюхерは語った。

—ところで、雲南軍と広西軍はどうでしょう—と誰

かが質問した。

—私は許崇智將軍に、作戰が成功した暁にこれらの<英雄達>が各自の家にばらばらに帰ってしまわないことを、当てにすることができるかどうか尋ねた。彼の予想では、広西の連中はきっと自分の省に帰ってしまうが、雲南の連中は雲南に行く者と、北方に向かって行く者とあるだろう、ということであった—とБлюхерは答えた。

淡水に向かってノ

2月12日、孫文政府の軍隊は淡水に対して攻撃に転じた。軍事顧問達は喜びと不安の入り交じった感情をいだいていた。敵の攻撃の先を越し、広東の革命基地を強化することができるのは、積極的な作戰行動によってのみ可能である。しかし、我々は攻撃を行うに際し、戦闘行動の舞台としてある程度慣れていた鉄道線路から、何度か離れざるを得なかった。全く不慣れた状況に陥るのは少しばかり、恐かった。そのうえ、本国で使い慣れていたような地形図を持っていなかった。その代わりに我々の所にあったのは縮尺なしの、一種の図にすぎなかった。それには地形や道路のようなものは全く示されていなかった。大きな町と町との間に、ただ真直な線が引かれているにすぎなかった。それは通信—電報、電話の存在を示していた。その地域の軍事的地形図に類するものを、我々は全く持っていなかった。データの無いのを補うために、この地域のことを知っている将校達に、いろいろ質問をしたり、地域の案内人に大いに世話になった。

鉄道線路を離れて淡水へ、さらに東方へと進んで行くと、我々は自分達が第一発見者、あるいは霧の中を進んで行く船の船長であるような気がした。我々の前途にある敵の防禦線を正しく判断することは不可能であった。敵と直接衝突して初めて、これが可能であった。2月10日、平湖付近で敵と接触した。手近な丘に上って、我々は自分の目で、地形を調べた。山々の代わりに、広い谷や狭い谷が現れており、道路は水浸しになった水田の中を走っていた。

肥沃な谷には、丈夫な石造りの家のある、大きな村や町が存在していた。山の方には村はあまり無く、それらはより小さく、建物はますます粗末になり、段々畑のような水田は次第に小さくなり、一番上の水田の面積は普通の文机の蓋の大きさを超えない程度のものであった。深い底の方のどこかに小川が流れている断

崖を臨んで、道路ではなく小道が延びていて、両側には険しい山が迫っていた。所々で、小道は峠に到ると分水嶺に沿って走っていた。そこから遠くに、山並の頂上が見え、そのほとんどが森の無い、裸のものであった。

このような道で戦闘になった場合、部隊の指揮官は縦隊の先端に立って前進しなければならなかった。彼らはソ連の軍隊でやるように、一晚勤務した後事情が許せば休息をとり、後で馬や自動車に乗って部隊に追いつき、縦隊の自分の部署に着く、ということではできなかった。

2月、広東は暖かかった。兵士達は軽装であった；空色の薄い木綿の上衣；膝上の半ズボン；ある種の引き船用のロープで編んだサンダル；ゲートル；防水用の油布が被せてある、ソ連軍タイプの軍帽。背中に何かの革で編んだ、大きな丸い帽子をぶらさげている者もあり、傘を持つかテントで作ったゴム引きの布地の外套を丸めて身につけている者もあった。これらはすべて行軍中の兵士達をスコールから守るものであった。レインコートを買う金は無かった。行軍の際、中国人は我々と違って50分毎に10分の小休止をとらなかった。軍装品が軽く、また一列縦隊で行軍したので、兵士達は比較的疲れなかった。2、3時間毎（山の陰しさに依る）に約15～20分休んだ。昼飯のための大休止もとらなかった。何故なら、野外用の調理場が無かったからである。兵士達は朝、出発前と夜に食事をした。食物は主として、米と何かの野菜なので、料理はとても簡単だった。兵士達の食事と食事との間の時間を短くしようとする、我々の試みは成功をみなかった。毎朝、2回分の食事を用意し、それを運ぶ手段が無いので、大休止の時の食事に前以て兵士達にそれを配給するよう、我々はアドバイスした。しかし、昼食用の食糧を受け取ると、決まった時間よりずっと前にそれを食べてしまった。万事、元のようにせざるを得なかった。1日2回の食事でも、もしそれがきちんと与えられるなら、戦闘行動に必要な体力を兵士に与えることができることがやがて、我々にはわかった。しかし、その食事はカロリーが低かったので、一食でも時間通りにとらないと、中国の兵士達はすぐに弱ってしまった。行軍中の弱点は警備、特に偵察であることが分かった。

すでに述べたように、我々には飛行機も騎兵隊も無かった。信頼できる警備を組織するように、と我々がアドバイスしたけれども、中国側の将校達はいい加減に聞き流した。この結果、後でわかるように、多くの

厄介なことが起こった。中国人の指揮官達は現実の状況から、この点に関して我々のアドバイスに従わざるを得なくなった。

この間に私の病状は悪化した。行軍中に食べるクッカーとお茶だけでは、栄養が全く不足していた。胃の悪い時、医者が何を勧めたか、どんな物で食事を補うことができたかを一生懸命思い出そうとした。飢えが身にこたえるようになった。ココアで私の食事を補うことに決めた。ある村でようやく、ココアを買い求め、牛乳入りココアを作った。

私は何応欽を〈宴会〉に私の所へ招いた。結果は予想外のことになった；將軍はこの飲み物がすっかり気に入り、古参の伝令兵に〈ココフェイ〉の作り方を私から学ぶよう命じた。この時から、連隊本部で、次いで師団、ついには全軍に、カカオの〈疫病〉が始まった。〈ココフェイ〉は行軍中、数キロずつ消費された。今や、何応欽は一日に5回も私にこの飲み物を御馳走してくれた。私は余りにも〈ココフェイ〉漬けになったので、ソ連に帰ってから約10年間は、ココアを飲むどころか、それを見ることもできないほどだった。

蒋介石は決断力において、勝れていたことは一度も無い人であって、自分の部隊をとて慎重に移動させた。2月13日15時までに、龍崗へ12キロ移動したのにすぎなかった。その夜、そこに宿営することに決めていた。16時、第7独立旅団長が第2歩兵師団のいる方角から朝九時ごろ、砲声を聞いた、と連絡してきた。蒋介石はこれは第2師団を攻撃しようとする敵の企図である、と考えたけれども、状況を明らかにするための手段を全く採らなかった。

2月14日、黄埔軍官学校連隊は顧問B.A. Степановの抗議を無視して、遅く出発し、ゆっくり淡水に向かった。その時、そこで銃声の音が聞こえた。張明德將軍指揮下の第2歩兵師団が淡水への一番乗りを目指して、自発的に、決然と進撃した。師団は敵の小部隊を撃退し、2月12日の夕方新圩を占領した。

2月13日8時、敵は第2師団に対して、惠州側からと同時に淡水側からも攻撃を仕掛けてきた。師団は攻撃を撃退しただけでなく、対抗行動にも成功し、ライフル銃と3丁の機関銃を手に入れ、約300名を捕虜にした。

張明德の軍隊は敵を撃退し、13日夕方までに淡水へ向かう道に出た。しかし、退却している敵を包囲しようとした時、第2師団自身が淡水から出撃して来た守備部隊に包囲された。指揮官と顧問が素早く対抗措置

をとったので、包囲は解かれた。

張明德將軍は極めて独特な性格の指揮官だった。敵に遭遇し、闘うために師団を展開すると、自分の指揮所になっていた丘のスロープを静かに降りて来て、籠からコンロと食料を取り出し、料理にとりかかった。その時間によって、それは朝食になったり、昼食になったりした。時々、三脚に取り付けてある双眼鏡の置かれている丘に上り、戦場を観察し、もし彼の見方で、万事順調に進行していると、下りて来て料理を続けたり、食べたりした。

張明德は將軍というよりむしろ、商人であった。師団と2隻の川船は彼にとっては、商売上の作戦、もしくは自分のテリトリーで税金を集める手段にしかすぎなかった。まさにそのために、彼は蒋介石より先に淡水を占拠したかった。つまり、市民の税金を集める権利を得たいと思った。張明德は簡単に町に近づくことができたので、前以って準備することをせず、暗くなるのを待って、淡水に突入することに決めた。したがって、警備隊の中から1個中隊を出したにすぎなかった。

顧問は張明德を説得して、この町を占領するに際しては、黄埔軍官学校の連隊と協力して作戦を行わせようとしたが、うまくいかなかった。將軍は自分の意見に固執し、中隊に町を占領するよう、命じた。命令を奉じて中隊は橋の傍で機関銃の銃火を浴びた。そして、指揮官と多くの兵士を失い、元の陣地に戻った。

2月14日、第2師団は敵を淡水に入る南からの道にある塹壕から追い出し、(またしても単独で)その町を占領しようとしたが、失敗に終わった。師団には大砲が1門しか無く、しかも、それは城壁に突破口を開くには小さかった。

14時ごろ、南から黄埔軍官学校の連隊が接近し始めた。町から5~6キロの地点で、第2連隊の先頭にいた顧問Паллоは町の近くの丘の上に、第2師団の国民党旗を双眼鏡で認めた。そして、この事を連隊長Wang mayu 將軍に知らせた。しかし、彼は先頭部隊にすぐに知らせなかったのも、彼らは第2師団の大砲や隊を砲撃した。撃ち合いが15分間続いた；大きな損害なしに済んだ。

すでに述べたように、東方出撃に際し、警備は実質的には無かった。そのうえ、何応欽は不確かな筋の情報に基づき、町はすでに友軍により占拠されている、と確信していた。我々顧問達も〈お目出度〉かった；町に向かって連隊の前を無警戒に進み、城壁の南東から強力な銃火を浴びたけれども、奇跡的に助かった。南

東方面に向かっている兵士達を、町を取り巻いている丘の背後に導かざるを得なかった。

淡水は大抵の中国の町と同様、石の城壁で囲まれていた。城壁は厚さ約1m、高さ4~6mで銃眼があり、門楼には閉ざされた門があった。これらが守備隊を銃火から守った。

高台に、我々の全火砲、つまり大砲2門、を据えて、我々顧問は連隊長達に、第2師団長と協定を結んで淡水を協力して強襲するよう、提案した。しかし、彼らは蒋介石が来るまで、いかなる重大な決定も下す危険を冒したくない、と言った。

17時までに蒋介石がやって来て、砲台の傍に指揮所を置いた。彼は顧問の Степанов に自分のプランを伝えた。

蒋介石は次のように提案した：第7独立旅団を平山の方角、淡水の北東に進める。軍官学校の部隊が東から、第2歩兵師団が西から町を包囲し、敵の降伏を待つ。蒋介石の意見によると、敵は約2日後に降伏するはずであった。

В.А. Степанов は敵の増援部隊が東からやって来る可能性があるのを、待っているのは危険である、というもっともな理由で反対した。ただちに夜襲の準備にとりかからねばならなかった。彼は主要な攻撃を軍官学校の連隊が行うことを提案した；第2歩兵師団の主力は南西から連隊を支援し、北と東から来る戦闘部隊を援護すること：第7独立旅団は待機していること。エンジニアの Н.Т. Васильев は急いで攻城用の梯子を準備せねばならなかったので、連隊の中から軍官学校生徒の1個中隊を選び出す必要があった。

蒋介石はひどくためらった後、このプランを承認した。主要な攻撃地点として、城壁の南東の角が決められた。この作戦のために、第1歩兵連隊が選ばれ、砲兵中隊には、突入部隊が入れるように城壁を破壊する任務が与えられた。

夜になって、Васильев は生徒達が18個の梯子しか用意できなかった、と報告した。22時、蒋介石は兵士達が疲労していることを理由に、攻撃を2月15日午前6時まで延期するよう、Степанов に提案した。

Степанов はそれに同意し、梯子をもっと多く用意し、夜明けまでにはそれらを連隊およびその他の各部隊に配布するように勧めた。

2月15日7時ごろ、大砲が準備砲撃を始めた。砲撃を指揮していた Бесчастнов は高台から、城壁の胸壁が砂袋で強化されているのをはっきり見ることができ

た。我々顧問は山砲用の弾丸を次のような方法で用意した：<アリサカ>式大砲用の薬包を短くし、目分量でその中に火薬を詰め、その弾丸を込めた。勿論、このような弾丸では、目標になかなか命中しなかった。しかし、目標までは1キロもなく、囲いの無い陣地から砲撃した。さらに指揮をとったのはソ連の師団の元砲兵隊長であった。それ故、かなり命中した。守備隊は榴散弾によって、一部は殺され、一部は城壁から逃走した。弾によって城壁の上部に、小さな割け目ができ

た。7時30分ごろ、第1連隊第1大隊がライフルと機関銃の援護の下、走って城壁に近づいた。しかし、攻撃用の梯子がまるでわざとのように、そこに無かった。兵士達は城壁攻撃のため、次々と出発点に集まって来ており、中隊旗は掲げられたが、梯子は相変わらず来なかった。不愉快にも作戦が延期された。

コーカサスのフェルト製のマントを着た蒋介石は砲座の後で、いらいらして行きつ戻りつしていた。時々、カラスが鳴くような鳴き方をし、腕を挙げてマントの裾を持ち上げた。彼は夜のうちに攻撃部隊に梯子を届けなかった責任は自分自身ではなく、まるで顧問の中の誰かにあるように、憎悪に満ちた目で我々を見た。

ずっと後、1937年、日本軍から南京を守る際、ソ連の勇敢な義勇飛行士の小さな部隊が日本空軍と英雄的に戦ったけれども、それが少数であったため、必ずしも南京を日本の空爆から守れなかった時、蒋介石はその部隊に感謝するどころか、むしろ不満を露にした、ということを私は後に知った。

何応欽將軍は水死人のようにまた青くなって、繁みの裏の傾斜地に蒋介石から身を隠した。丘から兵士達の所に走り下りて来ていた顧問 Никулин はどうしてよいか、わからなかった。

以前、軍務に就く前、いわゆる世間に出ていろいろなことを学べるように、私はいろいろな職業についたが、たまたま消防士にもなった。私は消防団で、梯子を使わず壁を登る方法を教えられたことを、ここ淡水の近くで思い出した。Екатеринбург にある、古い造幣局の材木倉庫で燃え上がった火を消す時に、私は実際にこの方法を使う羽目になった。その方法は以下のものであった：消防士の一人が身を屈め、両手を壁に突っ張り、もう一人が彼の背中から肩へ登る；最初の人が身体を伸ばし、二番目の人が壁の端を把み、目標の所へ身を持ち上げる。これこそ解決方法だ、と私は思った。私は Степанов と Бесчастнов に私の考えを伝え、後

者に、敵を注意深く見張り、適宜火力で我々を援護するように頼んで、急いで丘から下へ走り下り、Никулинと一緒に兵士達に実際のやり方を見せることに決めた。二人は裂け目の所まで走って行った。Никулинが屈み、私が彼の肩に乗ろうとした時、馳け寄って来た中国人の政治委員と旗手が我々のやっている事にすぐに気がつき、城壁に登るのをとめた。彼ら二人のどちらが先に登るべきか、を一寸論争した。政治委員は旗手の言い分一旗が先頭にあるべきだに十分説得力があると認めた。そして、そのコミニストの兵士が手に旗を持って、城壁の上に現れたが、すぐに負傷した。政治委員は旗を拾い上げた。そして、彼の後を動いている戦車のキャタピラのように、兵士や将校達が裂け目を登って行った。

内部から門が開けられ、兵士達は水が決壊したダムに流れ込むように、町の中へ流れ込んだ。この後すぐに、梯子を持った第2連隊の兵士達も城壁を乗り越えた。短い戦闘の後、町は黄埔軍官学校の第1、第2連隊によって占拠された。

敵の兵士300人だけが捕虜を免れて逃げた。それは淡水の北にある河口へ向かう第1連隊第3大隊の前進があまりにも緩慢だったからである。淡水付近で、全部で700人の敵を捕虜にし、約1,000丁のライフルと6丁の機関銃を手に入れた。

敵に対する追撃は実際には行われなかった：それを追撃したのは統一されていないいくつかの部隊で、しかもほんのわずかの距離を追ったにすぎなかった。我々の人的損害は約10人の戦死者と40人の負傷者であった。

戦いにおいて、兵士達はその勇敢さと機転の良さを示した。黄埔軍官学校第1回卒業生の若い士官達の大部分はその素晴らしさを示した。

闘いの後、第1連隊は町の北西に集結した。第2連隊の2個大隊と蒋介石の司令部は淡水市中にとどまった。第2連隊第2大隊は町の北東2キロにある、194.8mの丘に陣をとった。

10時ごろ、我々は敵が北東に集結したのを認めた。増援部隊がそこへ行く時間の余裕があるとは考えにくかった。恐らく、平山へ撤退する主力を援護するために、守備隊の1部隊が陣を構えたのであろう。

今まで何か決定を下す前には、将軍達が我々と相談してきた、という事実を認めたくなかったのが、蒋介石と張明德は正午ごろ、顧問を加えないで相談し、自分達で今後の作戦行動の計画を作成した。蒋介石はこ

の決定は最終的なものだ、と Степанов に通告した。黄埔軍官学校の連隊は沿岸地帯に沿って東へ進み、その後、船に乗り、淡水を撤退中の敵の背後で下船することになっていた。第2師団は平山へ、一方、第7旅団は惠州へ進撃するよう、指示が出された。В.А. Степанovはこの計画を知って当惑した。拳骨ではないが平手の打撃を受けることになるであろう。その時、敵を助けるために、約2千人の新しい部隊が惠州から接近して来た、という情報が届いた。二人の将軍はまたもや顧問達を加えずに、2月16日に作戦計画を作成した。それによると、第2師団と第7旅団は淡水の北にある河の東岸に集結し、敵の左の側面を包囲して攻撃することになっていた。蒋介石は町の西側にある河の左岸に、自分の第1連隊を送り、16日朝、そこへ第2連隊を派遣し、右の側面を包囲し、北の方角で攻撃に転じようとした。これらの部隊は第2師団と協力して、敵を包囲するはずであった。編成変えに際し、部隊の不必要な交差が生ずるような決定がなされた。

何を基礎に置いてこの作戦を立てようと考えたのか、我々には理解できなかった。当時はまだ、指揮官と顧問とが一緒に作業を進めて行く方法を、手探りで見つけ出そうとしている最中だったので、大部分の顧問達はこの失敗に終わった計画に敢えて反論しなかった；そこで、この決定は全軍に伝えられた。

蒋介石と張明德付きの顧問達は許崇智総司令官の本部にいた Блюхер に、電話ですべての事を報告しようとしていた。まさにその時、状況が急変した。16時ごろ、敵は攻撃に転じた。一方、第2師団の諸部隊は計画していた東岸へ渡河する代わりに、西岸に集結し、追って来た敵と交戦した。第7旅団は淡水の北で、優勢な敵軍と交戦し、困難な状況にあった。私と Никулин は何応欽将軍に、軍官学校第1連隊を西岸に移動させないで、元の位置に残すよう、アドバイスした。第2連隊の2個大隊と第2師団の第7連隊はこの時、市中にいた。戦線で何が起こったのか誰にも分からず、混乱が生じた。蒋介石と張明德の顧問達は自分の指揮官達の所へ急いで行った。

張明德の顧問 Сахновский は第2師団が困難な状況にあることを知った。張明德は自分の最後の予備軍、親衛隊を戦闘に投入し、状況を回復した。第7旅団は敵の猛攻を支えることができず、一部は町を通り抜け、一部は南東の城壁に沿って、南西方面へ逃げ出した。

В.А. Степанov は蒋介石に、状況がはっきりするまで命令の実行を延期するよう提案した。しかし、彼は命

令を出した以上それは実行されなければならない、と不満そうに反対した。この話し合いの15分後に、蒋介石の司令部のある街路上に退却した兵士達が現れた。逃げながら、彼らはうまく軍の物資を略奪して行った。蒋介石は死ぬほどびっくりした。第1、第2連隊にJinkengに撤退するよう叫んで、自分は逃走している兵士達に加わった。顧問達はパニックをおさえようとした、が不成功に終わり、町から最後に出て行った。少数の敵が町の北東にある丘の一つを占領したことを、我々は知った。狼狽した司令部の参謀将校達に囲まれた蒋介石を見つけて、我々の顧問達は敵がこれ以上進出して来るのを防ぐために、南東の丘にせめて1個中隊でも派遣するよう、彼に提案した。参謀将校達の間に声高い罵りが起こった、結局、1個中隊が派遣された。しかし、方向違いだった。この頼りなさを見て、顧問 Степанов, Бесчастнов, Дратвин, Палло が機関銃を持ち、敵の銃火を浴びながら、自分達で高地を占領し、敵をめぐめて砲火を開いた。その時になって初めて、蒋介石は顧問達に従って前進するよう、第2連隊の大隊に命令した。前進して来た部隊を見て、敵兵は抵抗なく退却し始め、逃走を始めた。これより少し前、黄埔軍官学校第1連隊の顧問達は第7旅団が敗走するのを見て、何応欽将軍に北東方面で反撃に移るよう提案した。第1連隊の猛烈な攻撃によって、敵は潰走した。このようにして、町を確保し、194.8高地で身動きできなくなっていた第2連隊の大隊を救い出すきっかけができた。

敵は平山方面に退却した。しかし、今度もまた、誰も追撃しなかった。

何応欽将軍、Никулинと私が反撃に成功して高揚した気分、戦果を報告するために町にある蒋介石将軍の司令部に向かった時、すでに暗くなりつつあった。城門を守っていたのは我々の黄埔軍官学校第2連隊ではなく、張明德将軍の第2師団第7連隊の兵士達であるのを見て、いささか驚いた。

我々が狭い道を回り道しながら、ガイドの助けで進んで行き、司令部にたどり着いた時は、すでに暗くなっていた。最初、入口に番兵が居らず、窓に明かりがないことに気がつかなかった。

—お前は我々を目的の場所へ連れて来たのか—と何応欽は厳しく尋ねた。

—ここです。

中庭は人気なかった。驚いて我々は家に入り、部屋を次々と懐中電燈で照らした。見つかったものは、あ

わてで散らかされた書類と目茶苦茶に動かされた家具だけであった。我々がそこを出ようとした時、第7連隊の将校の一人にばっかり出会った。そこで蒋介石の司令部がどこへ移ったか、彼に尋ねた。

—跑了, 跑了 (逃げた)——とその将校が答えた。

約2時間後、ついに我々は司令部と蒋介石自身を町から数キロ離れたところにある、廟の中で見つけた。

蒋介石は状況を詳しく知らず、戦闘に負けたと思い、第1連隊が攻撃を加えて敵が逃走したまさにその時、第2連隊に撤退の命令を下した。

蒋介石は我々に会えて、心から喜んだ。彼は第1連隊をそれが占拠している地域から、彼の司令部へ、できるだけわからないように連れて来るよう、おずおずと頼んだ。将軍は自分が勝利者であって敗者でないことが、まだ理解できていなかった。

—敵は撃退された。淡水は我々の手中にある。一体何故、町から守備隊を引き上げるのか。連隊は当地にとどまっていなければならない。—と私は反対した。

Степанов が私を支持した。蒋介石は少しためらってから私の意見に同意した。我々が外へ出た時、Степанов は私とНикулин に司令部が敗走した経緯を詳しく話してくれた。蒋介石は張明德とのゲームで、ボールを相手のゲートに入れてしまった；状況に通じ、パニックに屈しなかった第2旅団第7連隊に、不本意にも町を譲り渡すことになった。

その日の出来事を総括し、我々は第1、第2連隊の兵士達および黄埔軍官学校第一期卒業生の将校達の勇敢さに、特に言及した。彼らは先輩の指揮官達のようにパニックに負けず、また最大の危機の時さえもすべての命令を正確に遂行した。蒋介石、彼の司令部員、第2連隊長Wang Mayuが絶望的なパニックに陥ったのを我々は目撃した。間もなく、蒋介石は自分のやった事は忘れて、Wang Mayu将軍が戦闘の最中に、自分の連隊の一部がどこにいたか知らなかったことで、彼をそのポストからはずした。第2師団の指揮官、張明德は戦闘において自分が決断力のある、エネルギー的な人物であることを示した。皆が我々顧問達の献身的勇敢さについて語った。私には一つの事が明らかであった。—我々は戦闘において、適切な相互関係をつくりあげることができなかった。；我々はまだ完全には、戦闘を管理するようにはなっていなかった。

汕 頭 へ

淡水攻撃が終わり、前哨部隊を置いた後、蒋介石、張明德將軍と第7獨立旅団長は今後の攻撃計画について、自分達で何も考えようとしなかった。彼らは許崇智將軍と顧問団長 Блюхер の到着を、手をこまねいて待っているだけであった。

2月18日、В.К. Блюхер は淡水に着くと我々に、雲南の唐繼堯將軍は吳佩孚と協定を結び広西省へ攻撃を仕掛けた、と知らせた。今や、彼は省都から数日の距離の所に居た。唐繼堯は広西を獲得した後、広州攻撃をすぐに続けて行おうとしていた。

広西省の広州政府の同盟者達はこの脅威のために、范石生將軍指揮下の雲南軍第2軍が唐繼堯將軍を迎撃する目的で、至急、東江地区から西江地区へ移動するよう、強く要求した。范石生自身もこれを望んだ。

Блюхер は我々に語った。—それにもかかわらず、広州に対する最大の脅威は現在、西からではなく東から迫っている。広西の同盟者達は唐繼堯將軍の攻撃を阻止するに十分な兵力を持っている。我々が陳炯明に決定的な敗北を与えるまでは、范石生の軍団を西部へ移動することは望ましくない。確かに、雲南軍は博羅へ向かって急いで前進することはせず、むしろ、移動する真似をしているにすぎない。しかし、彼らがそこに居ると、林虎將軍の軍隊が攻勢に出た時少なくとも、そのことを我々に知らせてくれるだろう。広西軍は惠州へ進軍するように見せかけているが、実際は、その場で足踏みしている。そのうえ—と Блюхер は続けた。—広西軍を指揮している劉震寰が唐繼堯と秘密の交渉を行っている、という情報が届いている。広州政府の立場は困難である：資金が枯渇した。廖仲愷は広州の商人達より借金しようとしているが、そのためには陳炯明に対し勝利を得なければならない。そうなれば、商人達は金を貸すであろう。そして政府の収入も増大するであろう。私は許崇智將軍に、第3歩兵師団第6旅団、第1師団の1個旅団、吳鉄城將軍の旅団で野戦軍を補充する問題を、すでに提起してある。汕頭進撃に際し、我々の後方を確保するにはこれらの兵力があれば十分であろう。総司令官はこれらの部隊を戦線に送ることに、原則的に同意した。

我々に対抗して平山地区に集結したのは、洪兆麟將軍の軍団および Ye Dayu 將軍の軍隊であり、全部で約7,500~8,000名であった。楊坤如將軍は惠州城に閉じ

こもっていた。我々は林虎將軍の部隊に関する情報を入手していなかった。

中国の將軍達、特に蒋介石は渦に巻き込まれるように、惠州城に引きつけられている。しかし、勝利の鍵は城にあるのではなく、洪兆麟の主力軍の粉碎にある。我々が汕頭攻撃を展開する前に、それを撃滅する必要がある。私はこの事を執拗に主張してきた。2月20日に我々は出発する予定である。それでなくても我々は淡水に留まって、多くの時間を失っている。

Блюхер は全般の説明を次のように締め括った。始まった出撃の経験から、必ずしもすべての顧問が軍隊の中で然るべき地位を手に入れているわけではないことが分かった。我々がここにいる目的は中国人民とその革命の前衛が帝国主義や軍国主義の束縛から逃れるのを助けることである。顧問が参加して得られた勝利が顧問のお蔭とされるかどうかは不明であるが、一方、負けた戦いはたとえ顧問の責任ではなくとも、必ず顧問の所為にされるであろう、ということを中心に留めておくように。我々は常に全般の状況を知らねばならない、また我々の提案を將軍が受け入れるよう、強く説得しなければならない。これは我々が指揮官に代わることを意味するものではない。我々は彼を育て、教えていかねばならない。それは行軍中、戦闘中に行われねばならない。勿論、その際、有効な例をあげて教えなければならない。それ故、作戦および戦術上の諸問題を自分達のコントロールの外に出してはならない。

В.К. Блюхер がその晩我々に与えた指示は我々軍事顧問のすべてのグループが今後仕事をしていくうえで、極めて重要であった。私は今でも感謝の念を持ってこの話を思い出す。

2月20日に攻撃を開始する、という決定がなされたことを2月19日に、В.К. Блюхер が我々に知らせた。

第2師団と第7旅団は北の道を通して白芒花、さらに海豊に進まねばならなかった；黄埔連隊は稔山から海豊へ進むことになっていた。

2月20日、第2歩兵師団および第7旅団が非常に遅れて出撃した。軍は2時ごろ、町を通過して移動し、その北に集結した。10時、黄埔軍官学校第1連隊が送り出した斥候が思いがけず、敵と遭遇した。Lidan 村北方の丘の上で撃ち合いが始まった。連隊は戦闘のために、直ちに展開した。間もなく、Wang dofan—淡水間の道路上に、敵のさらにもう1つの縦隊が認められた。それは第1連隊の右側面を迂回攻撃しようとしていた。我々の要請に基づいて、我々の北方で黄埔校第2連隊

がすぐに戦闘に加わった。

戦いは高台で起こった。戦いは個々の地域で小部隊によって行われた。それ故、時には軍隊と軍隊の間の空白地帯で偵察されない地域がかなり存在した。我々の偵察はただ徒歩によって行われたのみであったので、その範囲は制限されていた。上級指揮官への報告も徒歩の伝令が伝えた。側面から、またひどい時は背後から、敵味方の確認できない部隊が不意に現れるのはよくある事であった。一体これが誰なのか—味方が敵か—、衝突が実際に起こるまで判断することができなかった。それ故、各師団、連隊、大隊は戦闘中、自分が敵ではなく味方であることを示すために掲げる旗を持っていた。

今や、見晴らしの良い高台で遭遇戦が行われ、両者が旗を持って進むのが肉眼ではっきり見えた。それは大きな砂箱の中の作戦のシミュレーションのようであった。

第1連隊の展開した諸部隊は敵と銃撃戦を行っていて、攻撃に移る連隊長の合図が分からなかったのか、あるいは何らかの別の指令を待っていたのか、その場所で撃ち続けていた。蔣介石が顧問達には秘密にして、その場所に留まっているように、という命令を下したのかも知れなかった。後に我々が見るように、まさにそのような命令が第2連隊長に与えられた。

敵の右側面を迂回攻撃するために、淡水河の谷に沿って送られた第3大隊は前進をせず、必要もないのに隊形を変え始めた。ついには、河を徒渉し止まった。できるだけ速かに敵を包囲するために前進するように、という命令を持たせて我々は大隊長のもとに伝令兵を送った。しかし、それは一体、何時到着するであろうか。戦闘が＜古典的な＞お傭兵のやり方によっていった：弾がある間は伏せて撃ち、その後、思い思いの方向へ逃げ出す。

是非とも連隊を攻撃に移させることが必要であった。

—彼らに手本を示さねばならない。前進しなければならない—と我々は何応欽將軍に提案した。

—機関銃座に兵を配置し、これによって攻撃を援護してくれ。私の方は1個中隊を引きつけて攻撃に向かう—と私は Никулин に言った。

私は小隊の一つに近づき、下手な中国語で、むしろジェスチャーで兵隊達に任務を説明しようとした。彼らは私の＜中国語＞が理解できず、伏せたままであった。そこで、私はまず小隊長から始めて次々と兵士を

起き上がらせることに決めた。ついに私の意図が理解された。兵士達は起き上がって大声で叫んだり、他の兵士達に合図を送ったりした。やがて、連隊全員が練兵場に向かう時のように、密集隊形で前進した。戦闘を交えず敵は退却し始めた。

この後、何応欽將軍は胸が痛かったために、私と一緒に攻撃に参加することができなかった、と長々と詫びた。

この時、敵の大部隊が山を降りて淡水に向かい始めた。しかし、北方からの我々の圧力を受けて、急いで平山方面に退却した。この戦いから、このような状況下では予期しない遭遇戦がしばしば起こり得ること、また敵である洪兆麟將軍の軍隊が非常に頑強であることがわかった。石竜、淡水への途中、彼らは淡水自体でかなり打撃を受けたにもかかわらず、再び我々を攻撃しようとしていた。

蔣介石は戦闘中、黄埔校連隊を指揮していなかった。砲火を聞きつけて、彼は淡水の北東約1キロの小さな橋のたもとに立ち止まった。

顧問 В.А. Степанов は監視哨から戻り、敵が南から第4連隊の右側面を包囲しつつあること、それ故第2連隊を急ぎょ攻撃に移させる必要があること、を蔣介石に知らせた。蔣介石は、自分の持っている情報によると敵は逃げたので、第2連隊はそれを追撃するよう命令されている、と答えた。これは嘘であった。約1時間後、В.К. Блюхер が第2連隊の所へ乗りつけて見ると、彼らはそこに留まったままであった。そこで、何故連隊は進撃しないのか、と尋ねた。実際には連隊に違った命令—敵の攻撃を撃退し、高台を占拠し、そこに留まること—を出していたことを蔣介石は認めざるを得なかった。

2月21日、白芒花と平山を占領した。かくて、第一次東方出撃は勝利をもって始まった。

* * *

軍事行動の過程の中で、中国の新しい国民革命軍が形成されていった。そして、その兵士達は国民党政治綱領の中に規定された民族解放戦争の諸目的を理解していた。

中国のコミュニスト達が積極的に参加して作成されたこの綱領は反帝国主義、反封建主義革命の発展を基礎として国家を統一し、民主化することがその主要な任務である、と宣言した。

＜三民主義＞および孫文が提起した三大政策—連ソ、容共、労農扶助—がこの時期の国民党の戦略路線

を決定した。＜国民革命は農民労働者が参加した時のみ勝利を収めることができる―と国民党宣言の中で述べられた。―国民党は労働者-農民運動に助力を与えてそれを発展させ、労働者農民の経済上の組織化を支持し、彼らを民族-革命運動に引き入れようとしている。＞

孫文政府は第1次東方出撃の際にかなり重要な役割を果たした＜労農扶助＞のスローガンを実行し始めた。

7月15日、中国の労働者は沙面島にある英仏租界で、中国人労働者や職員に屈辱的な規則（一定の時間帯に島へ入ることの禁止を宣言し、捜索が行われた等）が導入されたことに憤激し、ストライキを起こし、租界を立ち去った。

孫文政府はコミニストの提案に基づいて、市のストライキ参加労働者を各所に住ませ、彼らに物質的援助を与え、スト破りに対するビケを置くことを許可した。政府は連帯ストライキを宣言した広州-九竜鉄道の労働者による沙面労働者および職員の支援にも、好意的な態度を示した。政府は外国船に乗り広州で働いている中国人船員達のストライキも支持した。

政府は農民問題に関しても、一連の方策を立てた。国民党宣言の中で次のように述べられていた：＜中国は農業国家であり、農民はどの階級よりも苦しんでいる。したがって、国民党は土地を持たない農民や小作人達に、土地と経営管理のための用具を与えるよう、要求する。＞

この年の2月、彭湃を指導者としてコミニスト達によって海豊地区に作られた農民組合、および小作料軽減を求めて悪徳地主と戦っていた団結せる10万の農民達は陳炯明將軍によって解散させられた。農民は一般に、国民革命軍の進撃を助けた。

海豊、陸豊地区の農民指導者、彭湃は瞿秋白に劣らず興味深い人物であった。1929年、彼は瞿秋白より6年前、上海で地下活動中捕らえられ、国民党に銃殺された時、彼の大きな勇気とヒロイズムを示した。彼ら二人は勝れたコミニストで、いかなるものも彼らの目的達成を妨げることができなかった。

地主家族の出身者である彭湃は広東の貧しい農民の中でも最も貧しい農民達のリーダーとなった。彼が農民達の間で絶大な尊敬を得た理由の一つは、寒い時でも飢えている時でも、彼が彼らと共に暮らしたという点にある。広東省のこの地区を我々が通過した2年後、彭湃は中国で最初のソビエト型の人民政府―海陸共和

国一をここに築いた。そして、これは約半年間存続し、有名な井崗山だけでなく広東コンミュニンの先駆者となった。彭湃およびその同志達の我が国に対する態度がどのようなものであったかは、この共和国の中央広場が赤の広場と呼ばれたこと、またメインストリートに偉大なレーニンの名前がつけられていたことに見られる。

東方出撃を前にして、黄埔校にコミニストの指導する宣伝のセクションがつくられた。その労働者が用意したのは兵士向けのビラ50万枚、農民向けのビラ10万枚、革命歌の歌詞5万部であった。

これらはすべて東方出撃の際に配布された。住民が多数住んでいる地方では、例えば＜農民組合を組織せよ＞、＜小作料引き下げ＞のようなスローガンの下に、集会が開かれた。農民達は、特に海豊と陸豊では、国民革命軍の部隊を歓迎し、宣伝員の話を傾聴し、自発的に軍需品の運搬を引き受けた。そして彼らは多くの村で、革命軍の兵士を迎えるために委員会を組織した。人民の一致した支持が国民革命軍の出撃の始まりが成功した、第一の最も重要な理由であった。第二の理由は新しい国民革命軍の強固な中核を建設したことであった。それは黄埔軍官学校の第1および第2連隊で、傭兵ではなく義勇兵であった。これらの兵士達はコミニストの政治教育局員や黄埔校を卒業したばかりの、新しい革命精神を持つ将校達から好影響を受け、革命精神に徹し、何のために自分達が戦いに赴くかを理解していた。

中国は封建的分裂の社会であったので、軍隊を補充する、いかなる全国的システムも持っていなかった。軍閥は各々、自己の軍隊をつくった。また地方的愛国主義、郷土愛の気持ちを強調できるように、好んで自分の出身の省から兵士を募集した。

中国の都市では、当時、失業者が極めて多く、村では土地が不足していた。それ故、多くの農民達は自分自身が食べるために、また家族のためにいくらか稼ぐことが目的で兵士になることに同意した。傭兵に対しては平均して一カ月8元支払われた。そのうち6元は制服や食料のために控除され、2元が手元に残った。まさにこの2元が自分の家族に金銭的援助を与えたいと思っている＜志願兵＞を引きつけた。

体罰教育を基本とする軍閥の軍隊での兵役は辛いものだった。兵士達は軍事行動の目的にはまったく無関心であった。彼らにあるのは単に、敵の軍需品や捕虜になった将校を略奪し、それによって＜金持ちにな

る>望みだけであった。

陳炯明が広州出撃を前にして、住民に向かって行った呼びかけからわかるように、軍閥達は通常<圧制>から人民を解放し、住民の略奪を許さない、等の約束をした。勿論、その後、省で権力を獲得すると彼らは農民達を重税によって無慈悲に破産させた。

広州政府を一時的に支持していた<同盟>軍の兵士や将校達は略奪することに、別に異存は無かった。略奪は例えば、海豊で、陳炯明の邸宅に対して行われた。第2師団長張明徳の言葉によると、将校達は努力したけれども兵士達がこれを行うのを止めることができなかった。実際には、略奪は将軍自身によって組織された。当時、軍閥軍の兵士には、自分の生命を危険にさらす動機は何も無かった。彼らは各々、自分のために<戦略プラン>を立てていた。身を隠せる場所に横になり、時々射撃し、敵が弾を撃ち尽くし逃げ出す時を待っている。大抵の場合、それほど長く待つ必要はなかった。

国民革命軍で、他よりも補給のよかった黄埔校の部隊でさえもこの出撃期間全体で、兵士一人当たり200~250発、つまり一戦闘で50発の弾薬が与えられているにすぎなかった。大部分の軍閥軍のところでは、これよりもさらに少なかった。それ故、軍閥軍の兵士は戦いの士気が低かった。しかし、すでに退却し始め

た敵を追撃するときは鹿のように早くとび出した。そして投げ出された軍需品の中から、何か儲かるものを手に入れようとした。もし戦闘の秤が敵側に傾くと、<兵士一戦略家>は命令を待たずに敗走に移り、道々、自分達の輜重を略奪し、もし時間が許せば、住民が立ち去っている場所を略奪した。そのような軍隊に対して住民のとり態度は想像することができる。

形成されつつあった国民革命軍、特に黄埔校連隊では事情が異なっていた。その兵士達は軍国主義に染まっていなかった。そして、彼らの大多数は地方出身者であった。中国の貧困農民は良く組織された政治工作によって、革命の真の戦士になりつつあった。黄埔校および国民革命軍の新たに編成された部隊の政治委員達は帝国主義者と彼らの共犯者—中国の封建軍閥—から祖国を解放するための闘争という、現実に即した思想を兵士一人一人に伝えた。

昨日の、土地を持たない、あるいは少ししか土地を持たない農民達は国民革命軍の兵士になると、革命が勝利を得た時自分達に土地が手に入ると信じていた；そこで全力を尽くして戦った。住民達が間もなく、喜んで国民革命軍を援助するようになったのは驚くことではない。

* * *